

ひとりぼっちの魔王と任 侠ヘルパー

オスロ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人気のなくなつて久しいゲームの中で、人気のなくはないヒツソリ存在するナザリック地下大墳墓を攻める男がいた。

だがいくら探せどプレイヤーは見当たらない。モンスタートレインの様相で少ない被害が出始めたナザリックの主があまり重くない腰を上げる。

ギルドを維持するため、ひいては維持コスト圧迫させるであろうトラップの発動を防ぐために！

その時生まれた新たな出会いがその後を大きく変えらるゝも知らずにモモンガは跳ん

だ。

それこそが相手の思うつぼであるとも知らずに……。

目次

シケタ出会いに祝砲を淋しい再開に祝杯 を	1
-------------------------	---

シケタ出会いに祝砲を淋しい再開に祝杯を

VRNNO—RPG「ユグドラシル」。

北欧神話を題材としたファンタジー系のゲームで、仮想現実空間にダイブして実体験をしているかのようなリアリティととんでもないほどの自由度の高さがウリの大人気オンラインゲームだ。

プレイヤーは人間種（人間、エルフなど）と亜人種（ミノタウロスなど）と異形種（モンスター）の中から選び、その中から種族を選べる。

そして見た目を自由に変えたり、モンスターを討伐したり、未知を既知にする冒険をしたりとプレイヤーたちは各々が自由にゲームを楽しんだ。

そのおかげで、ユグドラシルはオンラインゲームとしては破格の12年もの間サービスが続いた。

だが、始まりがあれば終わりもある。

ユグドラシルは12年の幕を落とすこととなった。

ユグドラシル最終日、とある町中にて…

「安い安い、あれもこれも叩売りだなあ。と、お！こらあ掘り出しもんかね」

そういつてさつき買った小ぶりのトンカチぐらいある虫メガネを覗き雑踏に負けな
い声で

「おいオツちゃん！こいつはナンボになるね！」

「箱の中のもんはぜーんぶ金貨一枚均一だぜ。それとお兄ちゃんだ!!そんな年じゃねえ
よ、たく」

「あん？お兄ちゃんなんて呼び方知ってるような奴が若いわけねえだろ!?今の出生率考
えろよ」

そういうとドワーフのプレイヤーはたじろぐ様に身じろぎした後、動かない顔の頭上
に驚きのエモーション出しながら

「日銭稼ぐのに忙しい底辺が知るわけないだろ！学者かよ！ンで買うんか買わないん
か、どっちだ」と開き直った。

「買いたいのには山々なんだが、手持ちがさつきの買い物で危うい！だから、アイテムト
レードでどうだい？」

「ものは？って花火かよ。他当たれ！といつもなら追い出すが最後の祭りにならちよう

どいいか！よし成立だ。受け取んな、整理はお前の仕事だからな」

「おう、ありがとさん。アイテムボックスにぶっこんで、と。そいじや御免よ」

「まい、ど？あれ？もういなくなっちゃまいやがったよ。スキルかなんかか？こんな街中で？」

と不思議がったドワーフのプレイヤーが疑問に思ったのもつかの間のことですぐ次の客に気を取られて忘れてしまった。

彼の懐が異様に寂しくなっているのに気づくまで残り数秒、小さいギルドの在庫という名の宝物庫がごっそり減ってるのに気づくのにさらに数十分、そして、同じ通りにある店の亭主達が犯人に気づく頃にはゲーム終了間近というところであまりの手際の良さに呆れるやら驚くやらで笑いあうのであった。

その後貰った花火でロケットマンになった亭主たちは掲示板の祭りスレの一角を飾るのだった

「…ふざけんなよ!!みんなで作りあげたギルドじゃないか!」みんなで作り上げた理想だ。ここにあるすべてが、全部がみんなの思いそのものじゃないのか!」「みんなの居場所」そう。俺の、俺たちのつてギィあああああああ!」

「ほお、思ったよりも早く気づいたじゃないの。モモンガちゃん」

「日暮さん!それガチで心臓に悪いからやめてくださいって何度も言ってるじゃないですか!もう!!」

などといったダレトクモーションで離れる感情豊かな骸骨さんは今のパトロン兼アインズ・ウール・ゴウン略してAOGの元締め(笑)詰まるところ上司?なオーバードのモモンガさん。

「そして俺チャンが皆の救世主歩いてくる混沌こと日暮さんだ!」「ヒツコメ!」だが断る!!俺の種族はぬらりひよん。「うあ、マジで続けやがった」君のイメージと違い禿じゃないぞ!そこんとこよろしくな!!」

「種族特性は知ってますけど、出入りは管理させてくださいよ。ていうか日暮さん誰とはなしてるんです?リアルも独り身なんですよ?……あ!もしかして、違法ツール使っ

て酒飲みプレイとかしてないでしょうね！いやですよ、最後にアカBANされたせいでもこつちまで警告文飛んでくるの」

最近一人で放置すると独り言メーカーと化すからボケてるのにひどい言い草だ。まあ、かわいそうだとやわんとくがね。

「法律は守るさ。目の届く範囲でならな」「文章にして書き出させて事ですか？」

笑顔のエモーションだしながらの「察しがよくて助かるよ」いう態度の溜め息エモーションで返された。

お互い苦笑しながらも悪くない雰囲気だ。へろへろ君が去った後の慟哭はとりあえず収まったらしい。(相も変わらず不器用な人だね。もつと楽に生きれるだろうに)と、マジトーンで内心つぶやく。

「この世はルールを作った奴が勝つんだぜ。この場限りだがアンタだつて一応そのポジションにいるんだからさ、御触れの一つでも出してみればいいじゃないの。な、ギルド長様よ」

「……もう、必要ないですよ。それより最後は玉座の間で迎えるんですけどご一緒にどうです？」

そう言つてスツと手を伸ばしてくる。手を取らなきや壊れちまいそんなギルド長。

(はなしそらしたな。)内心は思うがお首にも出さずにその見向きもされなかった、無視され続けた手を眺める。

このまま友愛という鎖で縛るはたやすいが、そんなものは俺の趣味じゃない。
何より、筋が通らない。

であるから「オラア名誉会員みたいなもので正式な加入してないぜ? いや、しちまうか? ギルドへの登録、多数決で即断できるぞ!」

「今更ですか!?! 今まで何度も拒否ってたじゃないですか! というか多数決にならないし、じゃなくて、どうして今になって?」「案外寂しかったのかもな。俺も」

「終わってしまふことがですか?」そういうモモンガは懐疑的だ。退廃的というかストイックだから信用ないわな。

故に、お骨様を指さしつつ「友達のために、っていうのじゃあだめかね?」

「うわあ、臭すぎですよそのセリフ」

「おいおい、そんなこと言っているのか? 昨今の死因は大概呼吸器系だから今際のセリフなんて言えないんだぞお」

「どこの情報ですか! ソース出して下さいよ!」

「十年來の部下、血のあぶくタテながらベットのの上でおぼれたよ」

あの時のこと、忘れるものかよ。助かったかもなんて思っちゃまうからこそ…ナ。

（ん？止まっちゃまった？げ、エモーションも出ねえか。ちよつとパンチ利かせすぎたかな、反省反省）

「などと言ってみると初心なモモンガ君は止まってしまふのだ。さ、とつととギルドの登録済ませちゃいましょうや、大将」

「あつはい。さっきのつゝ「知らんほうがいいこともあるつてただだよ」え、あ、ていうか近いですよ！」

「ほら今までだつてアクの強いのとめてたんだろ。がんばれがんばれ」

そうどやししながら手続きながら玉座の前と向かった。であつた終わり。